2024.05.26（日）

【ご報告】第 2 回川崎支部「日吉台地下壕見学会」（ご報告）

川崎支部 支部長　山岸一雄

〇開催日時：2024 年 05 月 26 日（土）　13：30～16：00（慶応大学内 日吉台地下壕）
男女 9 名が参加（役員以外の一般会員は 7 名）。
日吉台地下壕保存の会への参加費用支払いは 1,000 円/人（慶応大学に支払う保険料）。
川崎支部からの参加者への支援費は 1,000 円/人。（参加者の負担はなし）

〇今回の見学会の参加者は約 40 名。町内会、会社のサークル等。保存会にお伺いすると、高校の社会科教育の一環で参加する方が多いとの事。大学生よりも高校生の方が質問が多く、真剣との事。

〇戦艦大和の発信を指令した連合艦隊司令部跡を訪れました。ご案内は「日吉台地下壕保存の会」（発足して 35 年間）です。戦争のむごさと、陸・海・空軍の縄張り争いとエゴのむき出しが分かります。

〇横浜市港北区の慶応大学工学部は海軍省に接収され、海軍省人事局功績調査部が使用し始めました。1944 年（昭和 19 年）9 月 29 日に連合艦隊司令部（司令長官 海軍大将豊田副武（とよだそえむ））は、学生が使用していた 3 棟の寄宿舎（ローマ風呂有り）に入り、10 月にレイテ沖海戦や神風（しんぷう）特別攻撃隊の出撃など太平洋に広がる戦域に作戦命令を下しました。

〇地下壕が掘られたのは 1944 年（昭和 19 年）9 月～11 月末のわずか 3 か月でコンクリート製の地下壕を 2.6km も完成させたのです。丹那トンネル（大量湧水による事故を乗り越え、本工事で多用された「水抜き坑」を編み出した）の施工会社（鉄道工業㈱等）。

〇地下壕の作戦室は 4 mx20mx3mH。地下壕は蛍光灯を使用した最先端の施設で、停電時はバッテリー室からの電力を受けています。終戦時の司令部は、約 1,000 名になりました。

〇地下壕掘削に当たり、近隣の住宅は有無を言わせないで 50m程住宅の移動をさせられ、掘削土は田畑に積上げられ、生活の糧を奪われました。

〇地下壕に入ると温度は 17℃～18℃に管理され、各所に立てられた竪坑からの自然風で換気しています。地下壕の各所には白い糸が 40cm ほど吊るされて、通風（1m/秒）が確認出来ます。
地上部から約 30m～40m（場所により異なる）の深さで、東西に 10 本のトンネルが有ります。

〇戦艦大和は長距離砲での主攻撃で作られましたが、一億総攻撃・玉砕の命令で出撃しました。その時の出撃命令を発信したのが、日吉台地下壕です。大和は魚雷を受けて艦隊に開口が出来ても、本艦のバランスを保つように設計されていましたが、米軍の総攻撃で海の藻屑になりました。

○米軍に電波の傍受防止で、日吉台地下壕は受信のみで、送信は電話回線で伝令を読み上げ、大船の送信所や川崎市高津区蟹ヶ谷の「海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊（ぶんけんたい）」から発信しました。

○短波通信なので、地球の裏側までの双発信が出来ます。特攻隊のモールス信号での長信号（ツーの連続音）が途切れた瞬間が、海の藻屑となったか体当たりした瞬間です。

○太平洋戦争での戦死者は約 310 万人、終戦年の 1945 年の 8 ヶ月間での戦死者は約 200 万人。国民総動員の名のもとに、「陸・海・空軍の縄張り争いとエゴのむき出し」により、紙屑の様に亡くなりました。慶応大学構内の欅等の樹木は米軍の空襲で裂かれ、今でもその様子が見えます。

○日吉一帯への空襲は 3 度、1945 年 4 月 4～5 日、15～16 日、5 月 24 日です。日吉は京浜工業地帯から離れれた学生の街なので、米軍が連合艦隊司令部をはじめとした重要海軍群と認識しての破壊行為とは言い切れない様です。理由は、投下された爆弾は焼夷弾が中心で、地下施設の破壊を目的の空襲ではないのです。今後、米軍の文書や写真資料での検証が必要です。

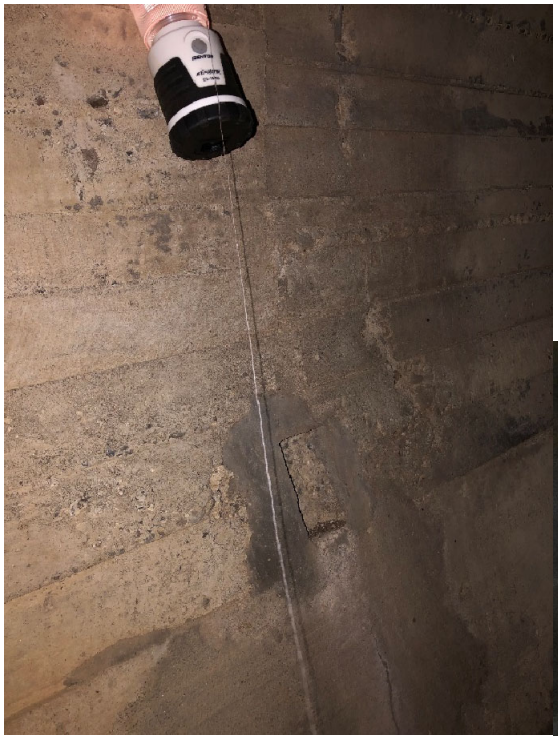
○今回の参加者は、緑土会、都市大収支 2 年生（総合理工学研究科機械専攻）の家族、OB ご夫婦等が参加され、戦争のむごさを知人や家族に伝えるとの意思表示が有りました。
是非見て頂きたい見学会です。

（集合写真－右端が山岸支部長）

（外部の通気口－壁厚約 1m）

（地下壕への入口）

（部分的に田園調布の大谷石を使用）



（通風１m/秒 確認用の糸）

（照明器具取付用木れんがの跡）

（寄宿舎の食堂の地上司令部への階段 126 段）

（日吉台地下壕保存の会の説明員－ボランティア－11 名が参加）

以　　上